

演歌歌手の市川由紀乃さんが闘う卵巣がん 少ない症状、加齢と遺伝が大きなリスク

演歌歌手の市川由紀乃さん（49）は令和5年から月経不順や腰痛などがあり、6年7月、卵巣がんと診断され、手術を受けました。その後、抗がん剤治療を受け、今年3月に復帰したと報告しています。

卵巣がんは女性特有のがんで、症状が少なく進行期での発見が多く、女性のがんの中では予後の悪いがんの一つです。

70歳女性Aさんは4年前、下腹部がぼつてりと腫れてきてジーンズが入らず腹満感もあり、かかりつけ医を受診しました。腹部超音波検査で腹水と骨盤内に15センチ大の腫瘍を指摘され、総合病院の産婦人科を紹介されました。

産婦人科で経膈エコーやMRI、胸腹部造影CT検査を受け、血液検査でがん抗原125（CA125）が高値で、左卵巣がんの病期Ⅲ期と診断されました。

その後、両側卵巣卵管と子宮、腹膜播種（はしゅ）病変を全て切除する手術を受け、完全に腫瘍は取り切れました。術後は3種類の抗がん剤で約半年治療し、その後、1種類の抗がん剤を2年間続けました。現在、外来定期的フォロー中で、再発は認めません。

■9割が上皮細胞由来

卵巣は子宮の左右に一つずつある親指大の器官です。卵子を育成し、女性ホルモンを分泌しています。卵巣には卵子をつくる胚細胞と女性ホルモン分泌に関係する間質細胞、それらを覆う上皮細胞の3種類があります。卵巣がんの9割が上皮細胞由来です。

卵巣に腫大や腫瘍（しゅりゅう）を指摘されることが時々あります。若い女性の場合は、ほとんどの卵巣腫瘍は卵巣嚢腫など良性が多いのですが、閉経後になると卵巣がんの可能性が高くなります。日本では年間約1万4千人の女性が卵巣がん罹患（りかん）し、5年生存率は60%ほどです。

多くの卵巣がんは閉経後に発症し、加齢は大きなリスクです。加えて初経が早く閉経が遅い、つまり月経の期間が長いとリスクが高まります。さらに、血のつながった近親者に卵巣がんや乳がんの人がいるとリスクが上がります。

実際、遺伝は重要で、例えば卵巣がんの 10～15%に「遺伝性乳がん卵巣がん症候群 (HBOC)」の原因遺伝子である BRCA 遺伝子に変異を認めます。米国の女優アンジェリーナ・ジョリーさんは HBOC のため、リスク低減両側卵管卵巣摘出手術を受けています。

卵巣がんの診療上の課題は進行するまで、ほとんど症状がないことです。腹部膨満感や食欲不振、頻尿など全身的な症状が表れたときには、すでに病期がⅢ期以上に進行していることが多く、予後が不良になります。有効なスクリーニング検査ありません。

診断は、卵巣に腫瘍を認めた際に腹部と経膈エコーで検査をします。卵巣がんの疑いが高いと CT や MRI 検査を追加し血液検査で CA125などを調べます。

標準的な治療は、肉眼的に腫瘍が残らない状態を目指して最大限の腫瘍切除をします（腫瘍減量手術）。両側付属器（卵巣と卵管）切除と子宮全摘を行い、がんが腹膜に広がりやすいので大網と転移のある腹膜やリンパ節を切除します。ここまで徹底するのは、減量手術後の腫瘍残存の有無や量が、その後の生存率や生存期間と関連するためです。

完全切除であっても術後には複数種類の抗がん剤治療を数サイクル行い、その後、しばらく 1 種類の抗がん剤治療を続けます。最近では抗がん剤もよく効くようになり、とくに遺伝子変異を持つ卵巣がんには著効する薬も出てきました。